

「霊場多峯主」の歴史

飯能市立博物館 学芸職員 村上 達哉

「霊場多峯主」というのは、昭和 19(1944)年に飯能第一国民学校が編集し刊行した、『飯能郷土史』の 99 ページにみられる項題です。その本文は、主に多峯主山頂下にある雨乞池について記述したのですが、最近、市域の代表的な大名墓である多峯主山黒田直邦墓(以下「直邦墓」と記す 写真 1)を調べるうちに、霊場としての多峯主山を別の視点で考えるようになりました。表 1 にまとめたのが、多峯主山頂及びその周辺に所在する、信仰・宗教に関係する場所や遺物の一覧です。造営・建立の年代順に並べてみると、多峯主山黒田直邦墓(享保 20〈1735〉年造営)が最も古いことが分かります。その後、直邦の 23 回忌や 33 回忌に墓所に石灯籠が奉獻されていくのですが、その間に周辺には宝篋印塔が建立されたり、礫石経塚が造営されたりしています。

中でも注目したいのは、明和 2(1765)年造営の礫石経塚です。現在、多峯主山の山頂にある礫石経塚の石塔裏面には「[]在霊山」との文字が刻まれています。「霊山」が多峯主山を指しているのであれば、18 世紀半ばに“多峯主山は霊山”と認識されていたものと思われる。その契機となったのは、やはり、直邦墓でしょう。

その後の「霊場多峯主」の歴史はというと、画期が慶応 2(1866)年に認められます。前岩の根元に、能仁寺 22 世徹恩大和尚の遺言により、線刻不動明王像(写真 2)が建立されますが、それを皮切りに、明治 4(1871)年には前岩の上に御嶽神社の社殿が建てられ、その後周辺には数多くの石塔・石碑が建てられます。前岩は俄かに御嶽信仰の聖地となった感があります。ただ、『新編武蔵風土記稿』という 19 世紀前半の地誌には、多峯主山の前岩について「此岩上なかんづく眺望いとよし」などとあるものの、信仰の場であるような記述は一切ありません。19 世紀前半には、前岩はまだ明確に信仰の対象として捉えられてはいなかったのかもしれませんが。



写真 1 多峯主山黒田直邦墓



写真 2
前岩の線刻不動
明王像

番号	名称	造営年など(西暦)	場所	備考
1	多峯主山黒田直邦墓	享保20年 (1735)	山頂 南側直下	飯能市指定史跡 黒田直邦は上総国久留里藩主黒田家の家祖
2	石灯籠	享保20年 (1735)	直邦 墓所内	当初の墓所造営によるものと、家臣(側近を含む)による奉獻
3	黒田直邦 頌徳碑	享保21年 (1736)	直邦 墓所内	撰文は久留里藩顧問の儒者である太宰純(春台)
4	石灯籠	宝暦7年 (1757)	直邦 墓所内	家臣による。23回忌の奉獻と思われる
5	宝篋印塔	宝暦13年 (1763)	常盤が丘	常盤が丘は常盤御前の墓があったと伝えられている
6	礫石経塚	明和2年 (1765)	山頂	黒田直邦33回忌に伴うものか?
7	石灯籠	明和4年 (1767)	直邦 墓所内	家臣による。33回忌の奉獻と思われる
8	馬頭観音像	寛政9年 (1797)	山頂南西 側直下	
9	線刻不動明 王像	慶応2年 (1866)	前岩	能仁寺22世の遺言による信心講中の4月の造塔
10	二十三夜塔	慶応2年 (1866)	前岩	二十三夜の月待による5月の造塔 御嶽神社そば
11	御嶽神社	明治4年 (1871)	前岩	江戸時代末に祀られた金毘羅社を御嶽神社に
12	清瀧	明治4年 (1871)	雨乞池 東側	黒澤村の16名による開基寄進
13	手洗石	明治4年 (1871)	前岩	牛頭天王の祠前
14	石灯籠	明治23年 (1890)	前岩	牛頭天王の祠前
15	御嶽山大神 碑	明治31年 (1898)	前岩	御嶽山大神・八海山大神・三笠山大神
16	猿田彦大神 碑	明治43年 (1910)	前岩	御嶽神社参道沿い
17	霊神碑	大正9年 (1920)	前岩	御嶽神社参道沿い
18	霊神碑	大正9年 (1920)	前岩	御嶽神社参道沿い
19	金毘羅信仰 の石塔	昭和14年 (1939)	前岩	御嶽神社参道沿い
20	二十三夜塔	不明	前岩	二十三夜の月待による造塔 御嶽神社そば
21	雨乞池	いつから雨乞い が行われていた か不明	直邦墓 南側	『飯能郷土の誌』(昭和13〈1938〉年改訂第二版刊行)中の記事が、雨乞池に係る現時点で最も古い記述

■ : 網掛けしたものは、多峯主山黒田直邦墓に関わるもの

表 1 多峯主山頂周辺の信仰・宗教に関係する場所と遺物

【引用・参考文献】

飯能第一国民学校編『飯能郷土史』(飯能翼賛壮年団 昭和 19〈1944〉年 99 ページ)

飯能市教育委員会『飯能の石仏』(平成元〈1989〉年 163・165 ページ)

飯能市教育委員会『飯能の石造遺物』(平成 4〈1992〉年 175・176 ページ)

蘆田伊人編『新編武蔵風土記稿』第九巻(平成 8〈1996〉年 107 ページ)